

## <巻頭言>



### ダム技術と現代ゆとり感覚

長谷川 高 士\*

近年におけるダム工学の進歩は著しく、大規模なものや高度の技術が要求される数多くのダムが、安全に建造されてきているのは周知の通りである。しかし多数のダムの建造が進むにしたがって、ダム技術の適用される自然環境は極めて劣悪化してきている。農業用のダムに例をとれば、かんがい用水の受益者が特定されているために貯水池の規模が小さいものの地域が限定され、その地域内での建造地点の選択において地質や地形に関する自由度が極めて小さくなっている場合も数多い。その結果、ダム工学としてさらに高度な技術を求められる機会も増えてきているといえる。これに対して、ダム工学に関連した広い分野における各種の知識の蓄積も豊富になりつつある。また、設計に必要な理論解析手法の開発も大いに進展し、施工技術も飛躍的な進歩を遂げてきている。したがって、技術は、新しく直面するかなりの難問題に対しても、それを克服することが可能な高い水準に達していると認められる。

一方、このような技術の高まりに対して、技術を求め、受入れる社会環境も大きく変化してきている。しかも、その変化の程度が最近急速に大きくなってきている。社会環境が変化すると、その中で生活する人間の意識や感覚が変化し、技術に求めるものも変わってくることになる。ダム工学をはじめとして土木技術は、終始、現代文明の基盤に深く関わっている。したがって、それに携わる人達は、日々、現代意識の要求に対応していると考えられ、その点からすると現代意識や感覚の変化に鈍感ではありえないといえる。

ところで、問題となる現代意識として、豊かさの感覚が時代を代表したものの1つとしてあげられるが、その感覚が金銭的や物質的なものから精神的なものに変化してきている。これに対しては単なる豊かさとは異なって、人の心の開放を求めるものとして、“ゆとり”という言葉で表される感覚として取りざたされている。ダムの技術の適用においても、現代に求められている、あるいは備えられなければならないと考えられるようになったゆとりの感覚は無縁のものではないであろう。

最近では、ダムを建造すると周辺整備や環境開発がおこなわれるのが普通になってきている。このように、ダムの建設を本来の直接的目的以外の点からとらえて、現代が求めている感覚に結びつける配慮をおこなうことは、ゆとり感覚を刺激する点で前進とみなして良からう。しかし、言うまでもなく、ゆとり感覚とは個人の感性である。したがって、このような

\* 京都大学農学部教授

場が与えられたからといって必ずしも個人個人のゆとり感覚が満たされることにはならない。周辺整備をおこなって、そこにきた人の気持ちをリフレッシュさせたり、くつろがせたりする場や環境を与えるといったことは、このようなゆとり感覚をお膳立てしようとするに過ぎない。とはいえ、このお膳立ては目的である本来の機能以外の要素に配慮することを通じて、現代感覚の求めに応じるものともなりうる。しかも、配慮される要素の質の程度によって無価値や害のあるものから、現代の求めるゆとり感覚ともなりうるので、こういった要素に配慮する立場は厄介である。質の高い要素に配慮するには現代感覚に対する鋭い感性が必要で、ここに、技術者にもゆとりが求められることになる。

従来、技術に携わる人間には何となくゆとりのような感覚は無縁のものであることが当然と考えられたり、極端な場合は有害のものであるかに受け止められてきたのも事実である。これは、そのこと自体技術が社会にいかに関強く求められてきたか、の証明でもある。技術者はこのような社会の要請をうけて、強い使命感にもえ、自己犠牲も振返らず困難な仕事をこなし、これに応えてきたからである。しかし、学問、芸術、技術からなる人類の文明とは、歴史に見るごとく、本来はあそびの心、無駄、余裕、ゆとり、といった事柄に関強く関連しているものである。ところが、これらの分野に専門家が生まれ、それに属した人達が活躍をはじめると、この人達には最初から社会の期待が集中する。専門家は、誠実であればあるほど、この期待に応えるべく熱心に仕事に集中し、これが使命感につながり、余裕のない状態に陥りやすいこととなる。特に技術は人間社会の日々の生活に対して関わりが深く、学問、芸術よりこういったことになり易い。したがって、技術者は余裕のない状態に入り込んでいく必然的環境にあるといえよう。

ところで、社会が高度化すると、発展した技術体系に基づいて、基準化という技術の一般化が求められてくる。このように技術を基準化することは、技術の段階発展の認定であって、その技術に対してえられる社会の合意点を明確にすることである。したがって、合意の枠にはいるものとそうでないものが明分されることにもなる。このため基準を意識しすぎた行為は、ともすれば技術者の自由な発想を拘束するものとなり、現代における心の開放を主張するゆとり感覚とは掛け離れた産物を生むことにもなろう。技術はまさしく人であり、その主体性によって行われるべきである。そうだからこそ、共通理念から著しく逸脱しない客観性をあたえる申し合せとして機能するのが基準の役割であるべきである。基準を制定したり運用する立場も利用する立場も、こういったことを十分認識することが技術者自身の心を開放することに強く作用し、その結果としてその産物が現代感覚にも受入れられるものとなるはずである。

現代社会は技術の役割に大きな期待をもつが、そこにはその自由な活動を拘束したり制限する要因も数多く存在する。こういった状況のなかで、なお求められる現代感覚を満たすには結局技術者個々の感性に負うところが大きい。ダム工学という、多方面にわたる知識と蓄積された経験からなる特筆すべき技術体系が、時代の感覚にも敏感であって、さらに飛躍的な発展を遂げることを期待する。